

## 編輯室の内外

また、とげ／＼しい霜柱の立つ時候になつて来た。例年のことながら、夜分凍りついた都大路が、お天道様と車の轍とで良い加減に担れ上げられて泥濘になる何十日かを過ぎなければならぬ。そして例年の通り、ランチの船長サンが、魚河岸の兄哥を想はせる恰好の悪いゴム長靴が、時を得顔に横行することになる。本誌の編輯にたづさはつてゐる義理からもあるが、一種の意固地から例の怪物長靴を穿かぬことに同人一同申合せてゐるが、今年ももう永年勤続して呉れてゐる編上靴は泥濘に濡れ、小田原提燈然たるツポンは、毎日泥飛沫の洗禮を受けてゐる。

このみじめさを早く除いてもらいたいためと云ふのが、怪物を穿かぬことの辯明である。手前味噌ながら、子連れのお菰さん

は貰ひが多とい同じやうに、泥しぶきを受けたみじめさの方が、道路を早く良くして貰ひたいとの注文にはキ、メが多いやうに思はれる。光る靴、折り目の正しいツポン共に持ち得ないではないが、首都お江戸の道路からが、それ等と對照すべくあまりに貧弱である。釣鐘に提燈である。破れ鍋にはドナ蓋をあてがうものだ。その式で頑張つてゐる。

が、その實物宣傳も、良い加減シビレを切らして居てもなか／＼手應へがない。本誌も年々歳々内に外に道路の改良のためにあらん限りの努力を續けてゐるが、其の効果はまだ、所期の幾萬分の一にも足りぬ、洵に心外である。

維新以來既に六十歳、道路ももう良い加減圓熟した機能を持つて良い頃である。いつまでも世界の釣鐘の傍へ提燈をシヨンボリプア下げたくない。同人一同幸にして元氣旺盛、筆硯を新にして路政戰場に堂々の陣立をしてゐる。讀者諸彦も亦俱に路政の爲に新しい意氣を以て邁進せられむことを、第九巻の初號に方つて一言しておく。

(十八公)

本號定價 五拾錢  
一ヶ年分 金六圓

東京市麹町區大手町一丁目内務省内  
發行所 社團 道路 改良 會  
發行兼 編輯者 上 山 陸 造  
東京市小石川區諏訪町五十六  
印刷所 常 磐 印 刷 所  
印刷者 堀 江 關 武